

山北町上山遺跡調査概要

1 9 6 9

新潟県教育委員会

はじめに

本県最北端の町、岩船郡山北町にある上山遺跡は、大川にのぞむ河岸段丘上に位置する縄文時代後・晚期の集落跡であるが、昭和35年における発掘調査の際、幼児の足型をおした土版や、精緻な巻貝型土器など特異な遺物が出土し、学界の注目をあつめるにいたり、昭和43年度、文化庁にその稀少価値がみとめられて、ついに国に帰属保存されることになった。

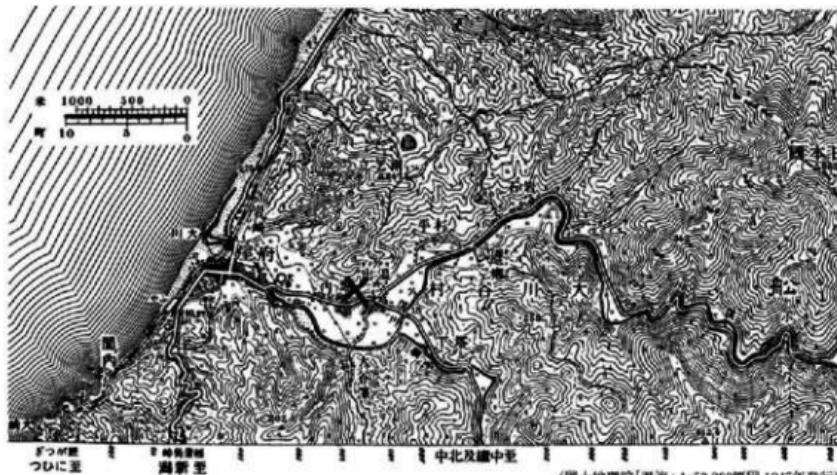
一方遺跡の所在地は、地元堀之内部落の耕作地で、近年杉種苗養成地としての畠地転用がはじめられ、このための給配水管敷設等により遺跡の一部が破壊され、今後もさらに破壊が進行するおそれがあるので、当教育委員会は、遺跡の重要性にかんがみ、山北町教育委員会の協力をもとめ、前回の発掘調査の成果を補ない、かつ遺跡の実態を明らかにし、その保存の資とするために昭和43年度国庫補助金の交付を得て緊急発掘を行なった。これはその概要である。

悪天候の中を熱心に調査にあたられた調査員の方々をはじめ、あたたかい御理解と御協力をいただいた山北町教育委員会御当局ならびに堀之内部落の方々に対して衷心より感謝申し上げる。

昭和44年3月

新潟県教育委員会

教育長 小野塚忠義



(国土地理院「温泉」1:50,000原図 1947年発行)



北方より望んだ遺跡全景（中央部のテントが発掘地点）

I 遺跡の位置と環境

上山遺跡は新潟県岩船郡山北町大字堀之内字上ノ山にあって、国鉄羽越線の本県最北端の府屋駅より東方へ凡そ2kmの距離である。遺跡は雷方面より流れる小俣川と、剛造山より流れ出る中郷川が合流して、大川と名をかえる附近の右岸、堀之内部落の背後に位置し、県道よりの比高約15mの段丘上に所在する。周辺一帯は現在、蔬菜畑、杉苗圃に利用されている。

遺跡周辺の景観は、前方大川を隔てた対岸には、西方の中世の府屋館址につらなる丘陵を望み、遺跡の背後には標高250mの雨乞立山がひかえて北方をさえぎり、西方に2kmに荒海の日本海を望む。また遺跡の中心附近より約50m西方の地点の湧水点が、北には雨乞立山よりの沢が流れ、まことに附近の環境は眺望も美しく、往時集落を営むに適切な地であったことが考えられる。

I 既往の調査

本遺跡の調査に至った動機は、昭和34年春、調査員の1人坂倉伝三郎が附近の畑に耕作によって散乱している土器片に気付いたことにはじまる。その際の表面採集遺物のなかに、本県におけるそれまでの知見には良好な資料に恵まれなかった縄文後期末

葉のいわゆる貼り瘤付の優秀な土器片が相当量混じっているのに注目し、以後数次に及んで青木宏らと表探を行い、遺跡の中心地点等を討議の上、所定の手続きを経て、翌昭和35年8月15日より20日まで、同好者によって組織した上山遺跡調査団により第1次発掘調査を行ったのである。

第1次調査は雨乞立山方面への小道の西側阿部一二氏所有の畠にA、Bの両トレンチ及び2地点に地層確認のためのピットを設定した。両トレンチとも表土下に縄文晩期土器を出土する薄い層があり、それ以下は後期末の土器を出土し、それ以前の遺物は確認されなかった。遺物は数個の完形を含む土器のほか、主なる出土遺物には、土偶、耳鉤、土錘等の土製品、有茎及び無茎の石鏃、磨製石斧、石皿、凹石、石匙、石劍、石棒、石錐、軽石製浮標、岩版等が出土した。このほか注目すべき遺物としてAトレンチ1区の東寄りの南壁の第2層、地表下55cmの地点より、幼児の足跡を明瞭に押捺した土版が出土し、また同トレンチ3区3層地表下75cmより巻貝を模した丹彩の完形の土製品が出土した。土版は梢円形をなし、全長12.7cm、幅6.9cm。新潟大学医学部解剖学教室の小片保教授の測定によって、足跡は満1才前後の幼児の右足で、足長幅指数によって男児の可能性が強いとのことである。巻貝型土製品は、長絆16.6cm、高さ7.3cm。器体は巻貝の軸端部分をわずかに欠失するほかは完好で、きわめて写実的で精巧に作られている。巻貝形の範となった貝の同定を行った早稲田大学理学部の直良信夫教授によれば、形態、殻頂部の特徴その他からトウカムリ科のカブトボラに最も酷似しているといふ。これら第1次発掘調査の出土遺物一括は文化財保護法の規定によって、昭和43年度国有となった。

第2次調査は翌昭和36年8月14日より20日まで行われた。これは重要遺物の出土したAトレンチ2区より、直角に南方に拡張したEトレンチの前年の掘残し部分の完掘と、かかる特種遺物及び、数点の袖珍土器、また人骨の小片も数例の出土が認められていることから、墓塚等の埋葬施設の疑いがもたれたので、その確認等が第2次調査の主なる目的であった。

調査はEトレンチ完了の後、同トレンチ第2区西方に1区を設け(2m×2m)同拡張区とし、前年のA・Bトレンチ間にG(2m×4m)、Eの南方にF(2m×6m)の各トレンチを設定した。しかし、Fトレンチは層位が浅く包含層は耕作によっ

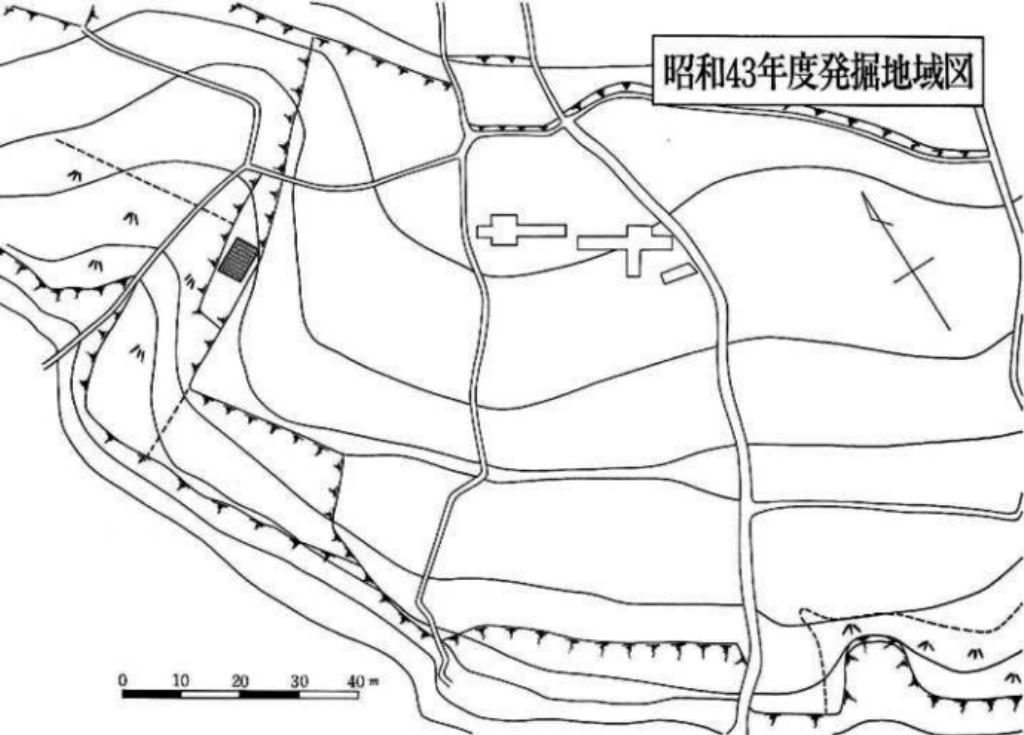
足型付土版(第1次調査)



巻貝形土製品(第1次調査)



昭和43年度発掘地域図



て搅乱されており、G、E拡張区も相当量の土器片及び石器類の出土はみられたが、所期の目的である埋葬施設等の遺構は確認できぬまま調査は終了した。有茎、無茎石鏃、磨製石斧、石劍、石棒、石匙、石錐、凹石、土偶、耳栓等が出土している。

III 調査経過

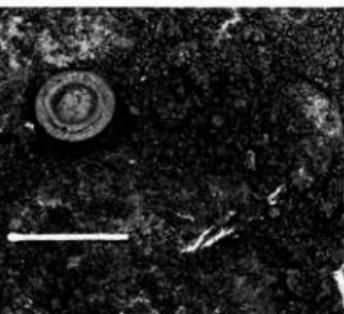
今次調査は前回の発掘地点A・Bトレンチ間に東西に $2m \times 15m$ のJトレンチを設定した。東端は幅1mとし、他は $2m \times 2m$ を区切って西に向って1~7区とした。また從来よりの懸案であった阿部氏所有畠地の西に隣接するJトレンチ地点より一段高い大滝安幸氏所有の畠地に、同じく東西に $2m \times 14m$ のトレンチを設定してIとした。また調査の後半に及んでJトレンチ南側の層序確認のため同トレンチ3区に南接して $2m \times 4m$ の2区分のトレンチを設け北よりK3、M3とした。次いで同じくJトレンチを設定した2区及び3区のみの発掘を行った。

Jトレンチは1及び2区の南側の一部が杉苗圃用配水管工事によって深さ1m程搅乱を受けており、また西寄りの7区附近では包含層がきわめて浅く、約30cm程度で遺物は地山の上に載っている状態で出土している。地山は西方に向って傾斜を強め一段高

い I トレンチの畑に続いていることが判明した。よって、この地形は人工によるものではなく、侵食その他によって自然に成立したことが考えられるに致った。J トレンチの他の地区の包含層は深く、表土では後晩期の混在した土器が出土し、深度30cmでは弥生式土器の若干、晩期土器もこの深度で出土している。この晩期の層は深く1、2区附近では地表下65cm前後にも及んで、この層より晩期の土版が出土している。それ以下は明瞭に後期の層である。この層では3、5区には土器片が集中して出土したことが注意された。5区の同じく深度70cmにおいて拳大の河原石を南北に2列にした列石群による遺構が発見された。この列石群は或いは東方に向って大きく円を描く環状をなすものとも想定されたが、今次調査では期日その他の理由から追及は中止し、今後の課題とすることとした。なお石組遺構としては、同トレンチ1区において、地表下90cmに小は拳大、大は人頭大程の扁平な河原石を数段に厚く敷きつめた層が発見された。この拡がりは、西方では2区境界線附近であるが、南側は配水管が埋設してあり、東側は道路で発掘は不可能でトレンチ内の観察のみではあるが、明らかに人意的なものと考えられた。この敷石は測量後剥ぎ取ってその下部の調査も行ったが、敷石は下層の無遺物の黒色粘土層に載っており、ピット等遺構の発見はみられなかった。

I トレンチの層序は J トレンチと異っているようである。この地点は比較的浅く、耕作による被害の比較的少ない1区附近では地表下20cm程に晩期の生活面があるようみられた。この面は堅く踏み固められており、この層に大洞A'式土器が集中して発見されている。同トレンチ5区北側、地表下35cmに70cm×80cmのほぼ円型に河原石

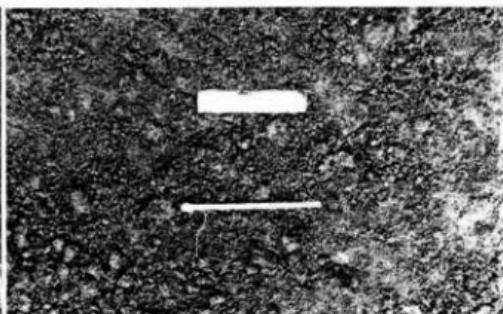
丹彩耳栓の出土状態



石棒の出土状態



碧玉製管玉の出土状態



土版の出土状態



を一列に囲み、西端に丸石を置いた炉址が発見され、床面を追ってトレンチを拡張した。しかし、根菜等の深耕によって部分的に荒らされてはいるが床面は堅く、比較的良好にも拘らず、柱穴及び住居址の限界は明瞭に確認することが出来なかった。西方部でゆるやかに傾斜をなす個所があって、ここを壁と仮定すれば径4m強の大きさの住居址となるが、確定的なものではない。この床面附近、炉址の北側より後期終末期の鉢型土器完形が1個出土しているので、住居址の所属期はその期とする可能性が強い。

住居址拡張区の6区、住居址の西南端に当る地点に30cm×40cmの範囲に大小10個程の石を囲んだ遺構があり、その中に柄部を欠失した石劍が小型の丸石に立て掛けるような状態で発見され、その北側の石列の傍にチャート製の石槍が発見された。この石組遺構は黒褐色土層中で床面より10数cm浮いており住居址とは直接の関連性は考えられないようである。晩期の所産とする疑いが強い。石組の下には遺構等の発見はみられなかった。

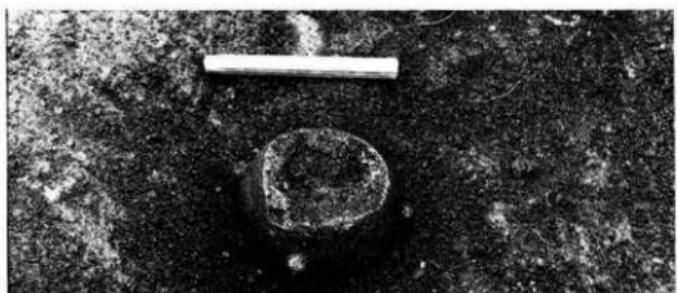
Jトレンチは表土下に礫が多く混じ、その附近より碧玉製管玉が1個出土している。管玉はJトレンチ2区のこの層よりも1個出土している。この層よりは晩期が出土し、この層とその下部、黒色土層との境界にローム質の土を薄く貼った面があり、この面上より土器が集中して出土している。この状態は3区で顕著であり、一部2区に及んでいる。この下部の黒色土層は後期の層で、3区では無文で大型の貼瘤のある注口土器が出土している。

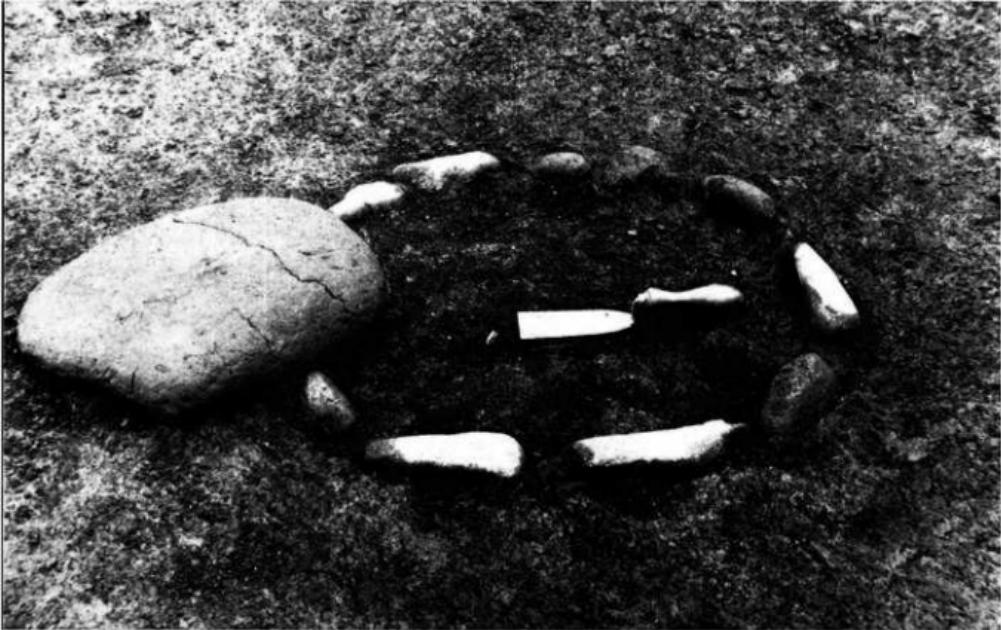
K及びMトレンチでは後期土器が相当量出土したが、部分的に攪乱が認められた。

大洞A'式浅鉢型土器の出土状態
(Iトレンチ)



貼り瘤付土器の出土状態
(Lトレンチ)





炉 址

IV 出 土 遺 物

遺物の整理、複元は未だ完了していないので、詳細は終了後の報告にまたねばならぬが、主なるものの大略を記すこととする。土器、石器等の出土量は、今次調査において石油箱にして 6 個程の量である。このうちには数個の完形土器が含まれる。

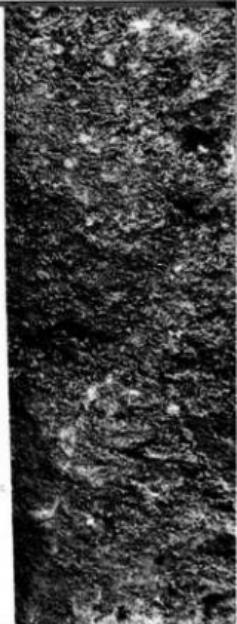
出土土器の大半は後期末の土器によってしめられている。そのうち絶対量では精製土器より多い粗製土器は、總て単純な器形の深鉢形に限られるようである。全面に斜行縄文を施したもの、平滑な器面に縱位又は斜行、流水文状、S字状の組み合せ等に櫛状工具による細い条線を付けたもの、より繊細な刷毛目を水平や縱位に引いたもの、ゆるい撚糸による網目状文のあるもの、及び無文の土器等がみられる。

精製土器はさらに多種類に及んで分類されなければならないようである。この期は磨消縄文手法が多用されるが、頸部を磨消縄文の帶状文で數段飾り、胴部文様を入組文によって飾る深鉢型土器が量的にも注意されるものであろう。この入組文には水平か又は一方下に下る連雲状のものと、數は少ないが渦巻文に近いものがみられる。

同じく磨消縄文で、眼鏡状に楕円型ないし木葉状の連続文様を數段施し、この文様の接続部分に貼瘤を付けたもの、これは深鉢のみでなく盤型土器にもみられる。これら深鉢型土器は平縁もみられるが、山形をなす口縁も多く、波状に近いゆるやかなもの、鋭く銳角に立つものもある。この鋭いものにはよく先端部を外方に屈曲させて上面に溝を付けたものや、山形の部分を縱位に須恵器の耳皿のように外方に反り返らせたものもある。これらの山形の口縁部の周辺に鋭い貼り瘤を連続させて飾り、三角



晩期土器の出土状態



型、×状、木葉状の磨消繩文を行っている。

繩文を施さず、細い数条の隆起線があぐり、これに緻細な刻み目を付し、これら隆起線の間はミミズ脹れ状の微隆起線文が恰も古墳時代の直弧文ないし、青海波文を想起するように施された一群がある。これは第1次調査の際出土した巻貝形土製品や、注口土器、壺型土器等、比較的小型の土器にみられるようである。

器面全体をヘラ等で平滑に仕上げた無文の土器で、胴の最大径部分に大きな瘤状突起を付けたもの。多くの場合この瘤に溝を付けるか、貫通した一孔を穿っている。これらは壺型ないし、注口土器にみられる。なお前回の調査の際に無文の高台付平縁の皿型土器が出土している。

この期の土器は装飾として貼り瘤を多用することは前記したが、貼り瘤の型態も種々みられる。鋭い円錐状のもの、円みのある乳頭状のもの、これに器面に対して直角に1孔を穿って恰も漢式鏡の環状乳のごときもの、梢円型で、これに横位に数本の、又は十字状、×状に刻み目を入れたもの、ボタン状の円板を貼り、周辺部に放射状に刻み目を入れたもの等がある。

数は多くないが、金剛寺式にみられる文様で、土器上半部に併行の沈線を置き、その間にヘラ状工具の先端等による刺突列点文を加えたものがある。Iトレンチ住居跡床面附近から出土した完型の鉢型土器はこの一群である。

今次調査で注意されたこととして、右の後期後半の土器に併出して、北陸地方の八日市式類似土器がJトレンチ3区で出土している。この土器は本県においてわれわれの知見に及んでいなかったものだけに今後の好課題であろう。以上は後期土器の主な

るものであり、詳細は本報告の際に譲りたい。

縄文後期後半以外の土器では縄文晚期の大洞B.C., C., C., A., A'の各型式が量的には多くはないが発見されており、これに伴うとみられる粗製土器もわずかながら検出できるようである。このうちA'式は越後平野では認めることの出来ない砂沢式類似の浅鉢型が出土している。また今次調査では若干量ながら弥生式土器の出土もあって、本遺跡出土遺物の様相は一段と複雑になったというべきであろう。

土器以外の石器、土製品類は別表によられたい。碧玉製管玉二点は、当然弥生式土器に伴うべきことが考えられるであろう。土偶は前2回の調査では、不完全な破片ながらいづれも数個体分の出土がみられたが、今次は1例も見出せなかった。

V 総 括

本県における縄文後期後半の遺跡の発見は近年とみに活発に行われているようにみられる。本土上山遺跡類似の貼り瘤式土器の出土地としては距離的に最も近い遺跡として岩船郡朝日村早稻田の古志王林遺跡があり、最近調査が行われたものとして、時間的にも上山遺跡に近似する新発田市板山の中野遺跡、資料は多くないが西蒲原郡分水町の幕島遺跡がある。その他中越地方にも小千谷市三仏生遺跡はじめ断片的ながら資料も見出せるようである。県外では著名な福島県小川貝塚、この期の多彩な資料で目を見張らせたいわき市寺脇貝塚、同県熱海町の遺跡、宮城県では名取市金剛寺貝塚、

J ト レ ヌ チ 全 形 (中央部コトレヌチを横断する石列が見える)



上山類似の貝型土器を出土した伊具郡丸森町の岩ノ入遺跡、山形県では谷定遺跡等がある。上山遺跡出土の土器はこれらとの対比、また本型式の時間的な前後関係、加曾利B式の新しい部分や安行式の各期との関連性等の比較分析が行われなければならぬ。

上山遺跡出土の主体をなす後期末土器は、今後の整理、他資料との比較研究が終了すれば判然とすることであるが、寺脇貝塚のごとき多彩さは見られず、裏日本的な様相を示して金剛寺貝塚におけるがごとき独自の文様構成をもつものとしては存在せず、前記した各型式のセットとしての構成比によって上山遺跡の特色が見出せるのではないかろうか。本遺跡最下層の土器に、加曾利B式の新しい部分を若干量伴うことが注意されているが、量的には古志王林や幕島遺跡例とは異なるかとみられており、これは今後これらの遺跡の資料と比較を行いたいと考えている。貼り瘤付土器を新旧ふたつに分離することが可能ならば、これもひとつのきめてになると思考されるからである。

(文責・上原)

今次調査出土の石器
および土製品類一覧表

石 鐵	{ 有茎	35
	無茎	3
石	匙	21
スクリーパー	3
石	楡	4
石	錐	6
磨 製 石	斧	10
小 型 磨 製 石	斧	3
異 形 石 器	1
石	棒	5
石	劍	3
石	槌	1
小 石	皿	2
砥	石	1
凹 管	石	2
土	玉	2
土	錘	1
耳	版	1
	栓	2

上山式土器に伴出した八日市式類似土器



あ　と　か　き

このたびの調査は、天候、日数、予算などの制約があって、発掘もまた小規模にとどまったが、当初のねらいとした縄文時代後期末に属する住居跡が確認され、また出土遺物においてもこの時期の前後を証明する重要な手がかりがつかめ、実りあるものであったといえよう。なお調査にあたった人々は次のとおりである。

新潟県教育委員会

<発掘調査にあたった人々>

発掘担当者	上原甲子郎		
調査員	磯崎正彦	関雅之	
	馬目順一	青木宏	
	坂倉伝三郎	酒井和男	
	石栗光		

発掘調査期間 昭和43年10月15日～22日

昭和44年3月31日発行

発行者 新潟県教育委員会

印刷所 細野印刷株式会社
